

平成30年度 第2回 清瀬市史編さん委員会  
議事要旨

日 時： 平成30年8月2日（木）  
午前10時30分～12時

場 所： 中清戸地域市民センター 会議室2

出席委員： 根岸茂夫、栗山 究、谷口康浩、浅倉直美、高村聰史、黒川徳男、齊藤隆雄、  
齊藤靖夫、坂間和英、岡田耕輔、黒田一美、小西一午、中澤弘行（13名）

欠席委員： なし

事務局： 企画部長、市史編さん室長、市史係3名（5名）

《次 第》

1. 開 会
2. 刊行に向けて
  - 1) 『清瀬市史 3 資料編 古代・中世』の装丁等について
  - 2) 各資料編目次案と進捗状況
3. 『市史研究 きよせ』第4号について
4. 市制施行50周年記念誌（啓発版）について
5. その他
  - 1) 今年度の啓発事業について
  - 2) 「清瀬市史編さん委員会設置規則」の改正について
6. 閉 会

《配布資料等》

1. 会議次第（平成30年度 第2回 清瀬市史編さん委員会 次第）
2. 『清瀬市史 3 資料編 古代・中世』の装丁等について【資料 I】
3. 資料編目次案【資料 II】
4. 市制施行50周年記念誌（啓発版）について【資料 III】

《審議経過》

1. 開 会

委 員 長           お暑い中お集まりいただきありがとうございます。ただ今より、平成30年度第2回清瀬市史編さん委員会を開催します。

事務局 議事に入る前に、事務局より配布資料についてご説明いただきます。  
(配布資料について説明)

## 2. 刊行に向けて

### 1) 『清瀬市史 3 資料編 古代・中世』の装丁等について

委員長 では、議事に移ります。

『清瀬市史 3 資料編 古代・中世』の装丁等について、事務局よりご説明をお願いします。

事務局 【資料 I】をご覧ください。タイトルはじめ、要点をまとめました。

印刷部数は、現在のところ 1,000～1,500 部を考えています。各自治体史で、古代・中世の資料編は売切れが相次いでいるということ、また、研究者の方の購入が見込まれることから、1,500 部を予定したいと考えています。

価格につきましては、調査中ですが、おおむね 4 千円に納まるのではないかと考えております。

判型は B5 版とし、表紙はフルカラーの表紙とカバーを付けます。本文 800 ページのうち、モノクロ 640 ページ、カラー160 ページを考えています。このほかにカラーの口絵が 8 ページです。書体は明朝体の 10.5 ポイント程度を考えております。謹呈用の短冊を 500 枚作り、ご協力いただいた方に献本いたします。以上です。

委員長 装丁について、B5 版にすることは前々から決まっておりました。本文のうち 5 分の 1 をカラーにし、朱印状の写真が効果的に掲載されることとなります。

これを基に、内容についてお話いただき、そのうえでご意見、ご質問をお受けしたいと思っております。

### 2) 各資料編目次案と進捗状況

委員長 【資料 II】に各部会の資料編目次案があります。まず、最初に資料編の刊行が決まっております古代・中世部会からお話してください。

古代・中世部会長 来年度刊行ですので、来年の今頃には原稿を印刷に出している段階になります。

古代・中世の資料編は、目次を見たところで概ね内容がわかっていただけるようなスタイルをとろうということで、今日お示ししているのがほぼ固まった形です。史料をテーマごとに分け、その中で古い順に並べます。

大きくは古代と中世の 2 部構成です。古代編のなかでは、悲田処のことをとりあげています。市域に悲田処があったとは言い切れないのです

が、悲田処の研究自体、50年程前に一度盛り上ったもののその後、見直しが必要とされながら取り上げられてこなかったテーマですので、今回、悲田処について、また悲田処研究について全国的な視野でわかるように史料を集める形をとりました。

東京都の自治体史の多くは、多摩郡だけの史料を扱っているのですが、古代に関する研究で、多摩郡、入間郡の両方から考えなくてはならないのではないかと新しい考え方があります。これを受けて、今回の『清瀬市史 3 資料編 古代・中世』では、1冊のなかに多摩郡、入間郡両方の史料を入れています。このことで古代の研究がより進むだろうと考えています。

第1部「古代」は、文字ばかりではありますが、史料の書き起こしに解説をつけて100ページ程度を考えています。

第2部は、「中世」です。自治体史はどうしても現在の県境、市境によって史料を集めることになり、道一本隔てただけなのに、となりの市や県の史料は載せないといったところがありました。そのやり方では清瀬市域は全貌が見えなくなります。現在の埼玉県側との交流のなかで成り立っていることもありますので、市域の北と南との史料も並べてみることでわかることもあるのではないかと考えています。

「中世」の第1章「中世前期の清瀬周辺」では、この市域にいた武士団の史料、今の地名につながるような街道の史料を集めています。こちらが解説を含めて50～100ページくらいになります。

「中世」の第2章「中世後期の清瀬」では、「清戸」という地名が戦国時代の史料に出てきますので、ここをクローズアップするとともに、この地域を支配していた大石氏、三田氏の史料を集める形で構成します。

清瀬は市域も狭く、400年以上前のことになると史料も限られてきますので、この地域が山内上杉氏と北条氏照の支配領域だったということで、視野を広げて史料を集めているところです。

写真の利用許可等の問題があるのでコピーをお配りすることができませんが、レイアウトとしては上段に写真を掲載し、写真の下には、文書にどのようなことが書いてあるかを紹介し、注釈を付け、視覚に訴えるような資料集にしたいと考えています。

写真撮影を含む調査の交渉はなかなかたいへんなのですが、事務局のご協力により、150点ほど載せたいと思っている北条氏照の文書のうち、既に100点は撮影を終えています。これを含め、中世後期の史料で350ページほどは目途が立っているのですが、更に調査を進めていますので、その成果を反映して、より充実できると思います。

また、第3部として清瀬の板碑をとりあげます。実際の写真よりも板碑にどんな文字が書かれているかわかるよう、拓本をとる作業を進めており、これに解説をつけて載せる予定です。これが50ページくらいになります。

あともう少し充実するように、この半年、1年くらいに急ピッチで調査

を進め、見て興味を持っていただけるような資料編に仕上げたいと思っています。

委員長

古代・中世の資料編は来年度刊行です。まだ調査が続きますが、目次をご提示いただきました。

まず、第1部の古代では、悲田処について考えてみる。武蔵の悲田処がどこにあったか、ということだけではなく、いま悲田処の研究がどうなっていて、全国的に悲田処がどのようなものなのかを考える史料を載せることによって考えていくというものです。

第2部では、多摩郡、入間郡との関係も考えながら史料を集めていく。中世鎌倉以降では、狭山丘陵沿いに村山党という武士団がいたことが知られています。また新座には片山氏という武士がおり、鎌倉時代京都に行き子孫が京都にいます。その中世文書が残っています。戦国時代の研究者にきくと、片山氏は、まかりまちがえば後で大名になる可能性もあった武士団だったといえます。それが新座の片山にいたということが史料から知られている。もうひとつは、鎌倉街道が関東の交通にとっても、政治にとっても大きなテーマとなっており、鎌倉幕府が滅びるときも新田義貞が鎌倉街道を南下してきて東村山の久米川、所沢の小手指では大規模な合戦があった。そういった史料を検討していく。

さらに中世の第2章において扱うのは中世後期、室町から戦国にかけての清瀬です。「清戸」という名前が次第に出てくると、芝山、志木街道の今の清瀬郵便局の少し東あたりに十玉坊という修験山伏がいたということが知られています。のちに埼玉の富士見に移るのですが、これが大きなテーマになっている。

柳瀬川一帯が大石氏に支配されたり、北条氏の支配を受けるなかで青梅の三田氏に関わってきたりする、そのあたりの史料を、特に中世後期については文書の写真をなるべく掲載して、他の自治体史との差別化を図るということです。

多摩地域の中世編は皆おなじようなことをやるのですが、北条の本拠地である八王子の市史では写真があまり載っていない。清瀬ではそうした文書の写真が多く掲載されるというところが大きな成果になるかと思えます。

ご意見やご質問をいただければと思います。いかがでしょうか。

委員

第2章第1節の(1)に「清戸をめぐって」とあります。『新編武蔵国風土記稿』には、清戸村という大きな村が昔あったが、ただいつの時代かわからない、といった書き方がしてあるのですが、そのあたりに関する情報があればぜひ知りたいと私は思っています。

余談になりますが、中清戸には日枝神社という神社があります。これは三清戸の氏神様ということになっており、鳥居の前にも三清戸と書いてあります。今でも氏子は上清戸、中清戸、下清戸にいて神社を支えています。上清戸には神社がありません。中清戸には日枝神社がありこれが氏神様です。下清戸は日枝神社を氏神様としていますが、これとは

別に八雲神社があります。

こうした変わった形態が、清戸村が大きくまとまっていたことの名残なのかと思うところもあり、そうしたことがわかる情報があれば、触れただけだとありがたいと思います。

清瀬の他の村である清戸下宿、中里、野塩にはそれぞれ八幡様や氷川神社などの神社があります。三清戸だけが特殊な形態をしているものですから、昔、清戸村とはどのくらいの範囲を言っていたのかわかる何か情報が知りたいと思います。

古代・中世部会長

そのあたりがきっちりわかれば、清戸番所の位置も理解できてしまうのですが、清戸が三つの清戸に分かれていくのは、人口が増えてからのことで、近世側の史料も見なければなりません。

「清戸」という地名は 1 か所だけでなく複数出てきますので、その辺の史料を中心に据えるということで、「清戸をめぐる」という節を設けました。

中世では、史料を見ていますと府中と岩槻を結ぶ交通路が浮き彫りになるのですが、これは必ず清戸を通っていないとありえない。どう分析するかによってこの節の名称は変わるかもしれませんが、これをテーマとして史料を集めているということで目次にあげています。

委員

ぜひよろしくをお願いします。

「清戸をめぐる」についてですが、清瀬の場合は新座や所沢など埼玉との交流もあり、婚姻関係も強くあります。片山（新座）と下宿、下宿から三芳、といった親戚関係もあります。この時代の歴史について、新座も志木も三芳も所沢も東村山も含めて、既刊の市史でも取り扱いが多いのですが、記載内容がまちまちなのです。高麗川町(いまの日高市)の高麗神社の記録だと思いましたが詳しく載っています。城山の滝の城の保存会の人でも発表していますが、それも、まちまちです。あまりにいろいろあるので、こういう機会に先生方にそういったものも参考にさせていただきつつ見解を示してほしいです。

最近出された市史のなかで、所沢市史では清戸番所の場所について、古い地図にのっている下宿の薬師堂のところではないかと言っています。関越自動車道ができるときに井戸を掘ったりして調べたときに、井戸のなかから古銭が出たり、板碑が出たといいます。昭和 42～3 年ごろの出土ですが、所沢では調べて、そのように書いている。理由として、氏照の薬師信仰、板碑のこと、井戸のことを挙げています。

番所は常時 50 人からの人間が生活するところで、それだけの水が出るところでなくてはならないはずだが、清戸では出ない。一方、下宿は水の豊かなところで、下宿では出る。

水が多いときには柳瀬川は渡れないので、鎌倉街道は所沢ではなく、下宿から新座に抜けていったのではないかという話もある。

新田義助の馬の言い伝えもあります。また、下宿の水再生センター近くの墓地に朝比奈三郎と言われる墓がある。鎌倉幕府が追いかけたので、

死んだことにして墓があちこちにあるとも言われていますが、そうした言い伝えが下宿にはある。

そうしたことも含めて参考にしてほしいと思います。

委員

口伝は口伝。それを立証するためには研究が必要です。口伝はあくまで口伝であって、整理したもの、裏付けがないとあやしい内容もあるので、判断が難しいのではないかと思います。

古代・中世部会長

中世以前の研究の重要なところを指摘していただきました。

限られた史料をどう考えるか、補足するどういう史料を持ってくるか、視点をどこまで広げるか、それによって同じ史料が全く違う性格のものに解釈されてくる。それでいろいろな意見があって、むしろいろいろな意見があることで研究は進むというところがあります。確実に他の説を否定できる史料があれば判断はつきますが、判断がつかないということは限られた史料でどう考えるかということで、これこそが中世以前の研究の本質です。説がいろいろあることは決して悪いことではありません。そこからどう考えるか。まして自治体史なので、個々の研究者が自分の論を展開すればよいだけでなく、清瀬なら清瀬を中心にどう考えるかということになるので、その辺も含め、ご意見を反映できるのは、資料編のあとの通史編になろうかと思います。いただいた課題は通史編までの宿題とさせていただきます。

言い切りにしてよいかという問題もあります。言い切ってしまうとそれが定説になり研究が止まってしまう。自治体史はかっちり言うてしまうのがよいのか、こういう研究があると並べるのが良いか、これは自治体誌編集の永遠のテーマで、どちらをとるかは、資料編を出したあとで通史に向けて議論をしつつ考えていきます。

自治体史は出して終りではないので、反対意見を否定するだけでなく、いろいろ挙げる中で、そこから研究が進むものが出ないと次につながらないと考えています。史料を集め、市民のみなさんに盛り上がっていたかなければなりません。

新しい史料が国内外のどこからか出てくる可能性があり、それまでの通説を覆すことも歴史学のおもしろみです。歴史学的に、また科学的にないことを書いてしまうわけにはいきませんので、今ある史料のなかで考えられることを出しますが、言い切ってしまうのではなく、次につながる含みを残すものになります。自治体史の性格をお含みいただき理解していただきたいと思います。

委員長

今の意見は通史編では非常に大きい問題になりますが、資料編ではどういう史料があるかを出していく作業になります

委員

さきほどの話に関連しますが、井戸の話は重要だと思います。

井戸は上清戸、中清戸あたりでも水面が高いところがあったので、自然環境として、不透水層がどのくらいのところにあったのか、といったことがわかれば、井戸の分布が、水に困った場所なのか、手掘りの技術で井戸が掘れた場所なのか、といったことが分かると思います。

- 委員 高田馬場に井戸掘りの組合があって、そこには井戸の水が出ているポイントがわかる資料があるそうです。井戸を今、掘削するような人たちはそこに行って方向を見るといいます。そこからはずれたところからは出ないそうですから。それは参考にならないですか。
- 古代・中世部会長 それが中世の水とつながるかどうかは立証できないので、そこを突かれてしまうでしょう。300年くらいのスケールだと水源も変わらないかもしれませんが、戦国時代の気候は今と違っていたことは通説ですから、400年前と今が変わらないことが立証されない限り、現在の井戸の情報を参考にするのは難しいと考えます。
- 委員 水道が普及する前の上清戸あたりの井戸は、何軒かに1つで、お金がないと掘れなかったのではないですか。
- 古代・中世部会長 中世では水の権利というものがありました。誰でもどこでも掘ればよいものではなかったのです。誰がその地域を支配していて、人員を村のなかで集められたか、といったことが関係します。だいたいご提案ではありますが、確実な史料がなければ語れないテーマでもあります。
- 大きなテーマですので、期間、費用の限られた自治体史のなかで扱うのは難しいと思います。
- お話している通り、完成編で出すつもりはないので、今回の市史でより多くの方に関心を持ってもらい、次の清瀬の歴史について考えていただく出発点になると良いと思っています。そのためにも、委員の皆さまから意見をいただき、次の世代につながるような市史を、広報や教育につなげてほしいと思います。
- 委員 資料編がテーマ別にまとまっているのは、よいと思います。多摩郡だけでなく周辺についても語っているのは、重要で良いことです。的を射た構成になっていると思います。
- ひとつ提案ですが、滝の城について、清瀬から近いことを知らない人も多いので、関わりの深さも含め強調してもらえるとよいと思います。
- 古代・中世部会長 ご提案ありがとうございます。ただ、資料編は考える材料を提示するものですので、滝の城についても、その名称が当時そういったのかという問題があり、また清戸番所についても目次にあげると、番所だけの問題になってしまうことを懸念します。
- 資料編では、道、十玉坊など全体のなかで資料として見ていただいたうえで、のちに通史編でどう展開するかという問題かと思っています。基となる資料編をかつちりまとめていきたいと思っています。
- 委員 関越自動車道ができる時、武蔵野線ができるときの調査で出土した板碑なども、資料として生かしてほしいです。
- 委員長 記録も確認しながら、この形で進めていき、次回はさらに詳しい内容を出していただくようにしたいと思います。
- 次に、資料編 考古、について説明をお願いします。
- 考古部会長 考古については現在調査中ですので、目次もまだ固まっているわけではないのですが、今のところの考え方を説明したいと思います。

大きくは1冊のなかに第1編と第2編による構成とします。第1編では清瀬と周辺地域の自然環境と遺跡の概要にふれたのち、市内の遺跡から出土した考古資料の中から特に重要なものを選んで時代別に紹介していきます。

内容がいちばん充実しているのが縄文時代、古代、近世の出土資料です。出土資料の量からいうと中心になるところですが、資料の少ないところも通史的に見ていけるように構成したいと思います。

第2編は仮に「特論」としてありますが、縄文土器に付いた植物種子の圧痕調査など自然科学的分析の成果をまとめたいと考えています。

また、柳瀬川流域の石器の石材調査も進め、それをまとめます。

進捗状況ですが、各時代を担当してくださる方が決まりました。次回は10月に考古部会を開きますが、定期的に打ち合わせと部会を開きながら具体的な資料の選定を進めたいと思います。

郷土博物館に収蔵されている考古資料について、少し修復をするともっとよくなる土器があり、少し縄文土器の修復をし直すなどして仕上げ、資料編にもいい写真をとって載せたいと考えています。

清瀬にすばらしい資料があることを市民のみなさんにも紹介できる場を持ち、資料価値をさらに高めるような事業を含め、やっていきたいと思っています。

委員長 今のご説明について、ご意見、ご質問ありませんか。よろしいでしょうか。

委員 了承

委員長/ 続きます、近世の資料編目次案についてです。

近世部会長

近世は、基本的に江戸時代の史料です。古文書が清瀬市内では数千点見つかっています。周辺の史料に比べて多いわけではありませんが、地域の史料を中心にしながら、江戸時代の村と村人、文化、信仰について目次案のような形で紹介していこうと考えています。

第1章として、村の姿を、絵図や「村明細帳」、これは村の概況を領主に提出したのですが、こうしたものを中心にまとめます。村の記録については、上清戸の村野家年代記があり、江戸時代のはじめ17世紀から18世紀のはじめまでの記録があります

第2章では、村の行政や自治についての機能がどういうものであったかについて、「村のしくみ」としてとりあげます。

領主との関係で、村では年貢などさまざまな負担がありました。更に村自身で帳簿をつくり、引き継いでいます。また、江戸時代になって村人が印鑑をもちはじめたことなどを載せます。

第3章「村のなりわい」では、生産、さまざまな職業についてふれ、第4章で「村と領主」をとりあげます。他の市町村史ではこれが最初に来ることが多いですが、清瀬市史では第4章としました。旗本の入封と系譜では、「清戸」という地名がどう書かれているかを見ていきます。鷹場、代官による支配などがテーマになります。

中里村は天正 19 年（1591 年）に武蔵という旗本が領主となり、幕末まで領主でした。近世後期の資料として、村の支配に関する史料が中里の渋谷家から出てきました。その中に、ご隠居がお金を使うために武蔵家が財政困窮に陥る様子がわかる史料があります。そのご隠居とは、江戸の本草学者 武蔵石寿(むさし せきじゅ)で、彼が近世に集めた昆虫資料は国内最古の標本と言われています。ちょうど今、東京大学総合研究博物館で展示されているのですが、言ってみれば中里村の年貢の一部がこの標本にかわっている。そうした話を書いていければと思っています。

18 世紀から 19 世紀にかけて村が変わっていきながらさまざまな事件が起こります。一方で村が連帯をし合い、自治的なつながりを強く持つようになり、領主の支配がだんだん弱くなっていきます。

第 6 章では「家のくらしと人の一生」、第 7 章では「村の信仰・教育・文化」をテーマとしてとりあげますが、特に俳句に注目しています。

下宿の八幡神社に、天保期の俳額があるのですが、元の原稿が高橋家文書から出てきました。清瀬で俳句というと昭和の石田波郷以降のことが言われますが、それ以前に市域においてさまざまな人が俳句をたしなみ、句会を開いていたという史料が、下宿だけでなく上清戸や中清戸でも出てきています。そうしたことから、当時の人たちがたいへんな文化を持っていたということを考えていきたいと思っています

第 8 章として近代とのつながりで幕末の問題をとりあげます。

一時、清瀬の一部が熊本藩に支配されていたり、葦山の江川家の支配を受けたりしていて、関連の史料が熊本や葦山にあるので、市域以外の史料も入れていこうと思っています

現在は、博物館の史料を中心に現物を見ながら、新しく出た上清戸の村野家の史料、中里の渋谷家の史料を整理しながら調査を進めています。石寿との関係は新しい史料のなかで見えてきたもので、今まで書かれていた市史とはだいぶ違ったものになりそうです。

近世について以上ですが、よろしいでしょうか。

では、近代についてお願いします。

近代部会長

刊行はまだ先ですので、変更もあると思いますが、今のところでの考えをお示しします。

大きくは、明治、大正、昭和戦前期というところで分けています。近現代の清瀬の歴史を見る中で中心になるのは、「農業」と「病院」だろうと思います。ただ昭和戦前期に入るまでは、やはり「農業」が柱となります。

資料編は全体を内容ごとに分け柱を設けて、資料を時系列に並べていこうと考えています。

現在に至るまで清瀬という小さなまちが合併されず来たことを理解するうえでも、周辺市町村の資料も見ながら浮き彫りにしたいと思っています。

明治の清瀬は三多摩の自由民権運動が大きくかかわっていきます。明

治 20 年代の議事録等のなかに自由民権運動の勢いを反映しているかのような議論が展開されているのが見受けられますから、この辺りが目玉になって行くと思います。最後に「村の生活」という項目を設けました。民俗編がないので歴史的資料のなかで村の生活を拾っていきたいと考えました。

大正期の柱は農業、商工業、教育ですが、現段階では商工業のなかには鉄道の開通を含めておきました。武蔵野鉄道の開通が清瀬の駅前、清瀬全般を発展させる画期になっていたのです、この分野は大きく膨らみそうです楽しみです。

関東大震災のとき、清瀬は都市近郊農村としてどう対応したのかを見たいと思っています。避難民の避難先になり、避難民の児童の学費を免除したところまではわかっていますが、都心への食糧輸送など救済活動の一面などが見えてくればと思いい項目を設けました。震災後の影響も含めて、大正期の清瀬は「首都圏」のなかでどういう立場に置かれていたのかというところに焦点をあてて資料を集めていきたいと思っています。

大正期の兵事と軍事については、在郷軍人に関する資料が、加藤家文書にまとまって見られますので載せていきたいです。

昭和はじめごろに病院ができてくるので、ここで新たに「病院」の項目が追加されます。次々と設けられていく病院、どんなものがあり、どのような関わりをもっていたのかを見ていきたいと思っています。

清瀬のなかで駅の向う側とこちら側はどういう関わりを持っていたのだろうと眺めていましたが、病院街とこちら側の発展とはあまり関係がないのではという気がしています。それを浮き彫りにできたらと思います。

戦時では、清瀬村の戦争で戦没者の慰霊も取り入れる予定です。また、村の人がどんな戦場に行き、亡くなったのかなど、また忠魂碑についての資料があれば載せたいと思っています。

近現代の境目を敗戦の 8 月 15 日に置きたいと考えています。占領期をどう扱うかは、現代で項目を立てます。他に、博物館にある日記をピックアップして載せたいと考えています。

現在、行政資料を見ていますが、それらの多くは議事録がメインのようです。議事録に村会資料が残されていないので、一般個人の民有文書の中から埋めていくしかないかと考えています。

委員 長

ありがとうございました。なにかご意見ご質問いかがでしょうか。近代については、まだ先の委員会でも機会がありますので、このようなことでよろしいでしょうか。続いて現代編についてお願いします

現代部会長

年代ごとに、村政の部分と経済社会の部分の項目別に分けていきます。

現代編の始まりは、基本的に昭和 20 年の 8 月 15 日ですが、例えば学童疎開などはそのあと 2 か月くらい続いているなど、近代と現代で適宜、分野ごとに分かれていく部分があります

終りについては、現在つくる自治体史としては、東日本大震災は含め

ることになります。そこから後については、来年度平成も終わることであり、これからよく考えていきます

現代編はいちばん身近なものであるにもかかわらず、どの自治体史を見ても現代編がいちばん面白くない。ひたすら行政文書的なものが並んでいたりして面白くないことが多いのです。

清瀬においては、行政史にはせず、市民の歴史にしたいので、分量的にも分野的にも市民の生活にかかわる資料を多くしていきたいと考えています。

現在の進捗状況ですが、議会事務局の資料で、村会の会議録が明治からずっと残されているのでそれを細かく見えています。また、郷土博物館に移管されている行政文書のほとんどが現代の資料で、その中から農地改革のあたりの資料を現在見えています。清瀬は農地改革について摩擦が激しかった地域ということですが、資料的にもその激しさが伝わってきます。

内容的にかなりなまなましいので、どのくらいまで出せるかわかりませんが、名前のところをなんらかの形で伏せるなどしてでも農地改革についての摩擦が伝わるような資料は載せていきたいと思っています。

以上です。

委員長

今後、細かい検討がこの会議でもされると思いますが、もし基本的なこと何かあれば、近代、現代についておねがいします

委員

河川改修が進み、地域の特性をかなり変えているかと思しますので、取り上げていただいた方がよいかと思えます。柳瀬川と空堀川については、川筋が変わり、それによって地域の町おこしを考えたり、橋の位置が変わったりということがあります。

現代部会長

承知しました。

委員

道も同じです。下宿から駅に行く道は、昔、私たちが学校に通った道と現在の道は全く違います。芝山もそうです。道路の変更は重要と思えます。

現代部会長

行政の歴史は重要ですが、それによって影響を受けた側、市民の側からの資料が出てくると非常にいい資料集になると思えます。

委員

町名変更もそうですね。昔、馬継をしなくなってから、薪をつくって幕府に出すようになり、現在の病院街の辺りは芝山と言って入会地でしたが、馬の数によって、下清戸はどこからどこまで、といった具合に変えたわけです。町名変更まで、芝山は持ち主によって上清戸の地番、下清戸の地番がありました。町名変更されて松山、竹丘、梅園になりました。

昔の地名は大字と小字がありました。清瀬村大字清戸下宿字貝戸、といった具合です。地名によって地形もわかります。昔の記録は小字の名前で残されていますし、町名のことも取り上げてほしいです。

委員

病院ができる前の宅地開発の問題は、どこで扱われるのでしょうか。昭和戦前期になるのでしょうか。土地の区画が今も残っているところも

ありますが、このことは割合に知られてないので、取り上げていただければと思います。

委員長  
委員

病院ができる前の位置づけですから、近代ですね。

自然の扱いをどうするかについてですが、現代の農業のところで農地の減少という項目がありますので、この辺りで自然の減少と大きくかわっているかと思います。ここで扱うためには、その前のことが必要で、考古で自然環境は扱われていますが、その後の時代経過のなかで触れられていないのを懸念しています。

委員

清富士通り、つまり小金井街道ができて大きく変わったと思います。東久留米へ抜けるまっすぐの道が、新座の新堀をよけて東久留米に行ったのは新座市を通らないで東京だけで道を通したのではないか、と言われています。

委員長

今日はいろいろな話が出ましたが、一度、委員会ではなく懇談会というような場を設けてお互いに自由にお聞きしたりする機会があってもいいかもしれません。

それは別として、今のような形で資料編のおおまかなところの進捗状況を話してもらいましたが、これからも検討の機会がありますので、今日はこのようなところでよろしいでしょうか。

委員

了承

### 3. 『市史研究 きよせ』第4号について

委員長

では、『市史研究 きよせ』第4号について、事務局からご説明をお願いします。

事務局

今年度、『市史研究 きよせ』第4号を刊行予定です。

内容構成としましては、第3号同様と考えております。第3号では新しい企画として「石碑・石仏探訪」というコーナーを設け、おふたりの委員に記事を担当していただきました。第4号においても、継続の企画とし、ぜひ委員のどなたかに担当していただければと考えております。

委員長

いかがでしょうか。今ここで決めるということでもなくとも、編さん室と相談しながら決めていただけたらと思います。

委員

前回お役に立てなかったのも、もし私でよろしければ今回担当したいと思います。

委員長

ありがとうございます。ぜひお願いします。

もうお一方について、また、他の構成についてもこれから編さん室と調整しつつ進めるということでもよろしいでしょうか。

事務局

部会の報告等については、個々にお問い合わせの予定です。

現代部会長

聞きとり調査の報告も1本掲載させていただきたいです。内容については追って固めます。

委員長

『市史研究 きよせ』第4号について、他にご意見などありますでしょ

委員 員 　　うか。よろしいでしょうか。  
了承

#### 4. 市制施行 50 周年記念誌（啓発版） について

委員 長 　　それでは次に、市制施行 50 周年記念誌（啓発版）について、編さん室  
からご説明をお願いいたします。

事 務 局 　　これまでいろいろご意見をいただき、誌面構成と仕様について事務局  
で【資料 III】のようにまとめてみました。

仕様につきましては、表紙を含め 64 ページ程度、発行部数は 3,000 部  
を予定しています。式典等で配布したり、編さん室で販売することを考  
えています。

制作の基本方針としては、写真や図版を多くとりあげ、親しまれる内  
容にしたいと考えております。

刊行スケジュールについてですが、平成 30 年度は、いま構成の確認を  
させていただいております。この後、市史編さん室でテーマに沿った  
写真の洗い出しと原稿案の作成をいたします。

掲載する写真の最終的な選定については、来年度、委員のみなさまに  
ご相談する予定です。編集作業は業者委託で進め、できあがりの確認を  
委員会に、監修は専門部会長をお願いしたいと考えております。

写真中心の部分については、市史編さん室で原稿を用意いたしますが、  
図版中心の部分につきましては、部会長の先生方のお力をお借りしたい  
と思っております。

市制施行 50 周年を迎える平成 32 年 10 月 1 日刊行ですので、当該年  
である平成 32 年度に入りましたら印刷契約を結び、9 月中旬までに納品さ  
れるよう進めたいと考えています。

委員 長 　　レイアウト案をいただいているので、回覧します。

レイアウト、構成につきましては、委員会の場でこれまで検討がなさ  
れてきたところです。近世まではあまり重きを置かず、特に清瀬村がで  
きて以降について写真を中心に振り返る形にしたいということ、図版、  
写真中心にするということで、仕様は A4 版で 64 ページ、カラーです。

さらに、スケジュールですが、今年度はだいたいの構成を確認するう  
えで、編さん室で基本的にテーマに沿った写真の洗い出しをする。回覧  
中のレイアウト案のように、ひとつひとつの写真について絵解きのよう  
にするというのが大きな特徴だったと思います。一応の原稿は編さん室  
で作成していただく。31 年度から 32 年度にかけて、委員の方々にも写  
真選定についてご協力いただくということですね。

副 市 長 　　監修は部会長をお願いするのですか。

事 務 局 　　内容について歴史的に誤りがないかどうかの監修は専門の先生方に  
お願いしたいと考えています。

委員長 事実関係で正しいかどうかについては、地域の方の方が詳しいと思います。ここはもっとこう書いた方がよい、といったお話を委員の方々にしていただき、監修全体としては編さん委員会で責任を持つということでいかがでしょうか。

副市長 もう 1 点、もう少し詳しいスケジュールをお示しした方がよいでしょう。

委員長 次回は年度末ですので、それまでにも連絡をとって早めに進めたほうがよいですね。

記念誌について、他に何かありますか？よろしいでしょうか。ではこのような形で進めることといたします。

## 5. その他

- 1) 今年度の啓発事業について
- 2) 「清瀬市史編さん委員会設置規則」の改正について

委員長 では続きまして、今年度の啓発事業について、「清瀬市史編さん委員会設置規則」の改正について、あわせて事務局からご説明をお願いします。

事務局 今年度の市史講演会は現代部会の黒川先生にお願いすることになりました。時期やテーマはまた追ってお知らせいたします。

「清瀬市史編さん委員会設置規則」の改正は、部会の設置要領がなかったのをつくるにあたってのものです。ポイントとしては、報酬、費用弁償についても記載したこと、また、調査上知り得たことについての守秘義務についてもふれましたので、よろしくをお願いします。

委員長 毎年、部会長が講演会を開いていますが、今年度は現代部会の黒川先生にお願いするというので了承をいただいているということです。

編さん委員会の設置規則につきまして、これまで各部会の規則がなかったので、部会を置くことができるとし、それに対する要領をつくったということです。

部会長の役割や、費用弁償なども毎年定める範囲で支給する、守秘義務についても定めたということです。

部会長会では承認を得ましたが、これについてよろしいでしょうか。

委員 了承

委員長 それでは、この形でおねがいできればと思います。

ほかに何かございますか。

事務局 今年度第 3 回委員会は年度末近くに予定したいと考えております。具体的な日程調整につきまして、また、市制施行 50 周年記念誌の細かいスケジュールについても改めてご連絡させていただきます。

委員長 懇談会、自由に話し合う場を持ってはどうか、という提案をいたしました。いかがでしょうか。事務局に調整していただくということで、

委員 員                    よろしいでしょうか。  
                                 了承

6. 閉会

委員 長                    では、もし他になければ、これで平成 30 年度第 2 回清瀬市史編さん委員会を終了します。

## 『清瀬市史 3 資料編 古代・中世』の 装丁等について

書名	清瀬市史 3 資料編 古代・中世	
部数	1,500部 (予定)	
判型	B 5 判	
表紙	紙クロス (カラー)	
	タイトルは印刷用フォントを使用 (デザイン時に決定)	
製本	上製本糸かがり丸背 (スピン2本)	
カバー	あり (カラー)	
見返し	あり	
予定頁数	本扉      カラー    1頁	
	口絵      カラー    8頁	
	本文	モノクロ 640頁
		カラー    160頁
本文活字	書体      明朝体 (一部はゴシック体)	
	柱          偶数ページに章タイトル、奇数ページに節タイトル	
化粧箱	なし	
謹呈短冊	500枚	

資料編 目次案

- \* 考古
- \* 古代・中世
- \* 近世
- \* 近代
- \* 現代

## 資料編 考古 目次案

### 第一編 清瀬市内の遺跡

#### 第1章 清瀬の自然環境と遺跡の概要

##### 第1節 清瀬の地理と古環境

##### 第2節 清瀬の遺跡

#### 第2章 旧石器時代

##### 第1節 清瀬の旧石器時代の概要

##### 第2節 旧石器時代の遺跡

#### 第3章 縄文時代

##### 第1節 清瀬の縄文時代の概要

##### 第2節 縄文時代の遺跡

#### 第4章 弥生時代

##### 第1節 清瀬の弥生時代の概要

##### 第2節 弥生時代の遺跡

#### 第5章 古墳時代

##### 第1節 清瀬の古墳時代の概要

##### 第2節 古墳時代の遺跡

#### 第6章 古代

##### 第1節 清瀬の古代の概要

##### 第2節 古代の遺跡

##### 第3節 出土文字資料（墨書土器）

#### 第7章 中世

##### 第1節 清瀬の中世の概要

##### 第2節 中世の遺跡

#### 第8章

##### 第1節 清瀬の近世の概要

##### 第2節 近世の遺跡

#### 第9章 近代・現代

##### 第1節 清瀬の近代・現代の概要

##### 第2節 近代・現代の遺跡

### 第2編 特論

#### 遺物の自然科学分析

#### 石材調査

資料編 古代・中世 目次案

第一部 古代

第一章 悲田処をめぐって

第一節 武蔵国の悲田処

第二節 九世紀における地方の救済・医療施設

第三節 悲田・敬田・唐の悲田養病坊

第四節 奈良時代の悲田院・施薬院

第五節 平安京の悲田院

第二章 古代の武蔵国

第一節 多摩郡

第二節 入間郡

第三節 武蔵国とその周辺

第二部 中世

第一章 中世前期の清瀬周辺

第一節 多東郡・入東郡の村山党

第二節 新座郡の片山氏

第三節 鎌倉街道久留米川宿の周辺

第二章 中世後期の清瀬

第一節 清戸と芝山十玉坊

(1) 清戸をめぐって

(2) 十玉坊

第二節 大石氏

第三節 三田氏

第三章 山内上杉氏の花押

第四章 北条氏照の花押

第三部 清瀬の板碑

第一章 村のすがた

- 第一節 描かれた市域
  - 第二節 村のありさま
  - 第三節 村の記録
- 村絵図・鷹場絵図・国絵図・版行絵図  
村明細帳・村高書上・郷帳・地誌  
年代記

第二章 村のしくみ

- 第一節 五人組と村役人
  - 第二節 村議定
  - 第三節 村の負担
  - 第四節 村の帳簿
- 五人組帳・村役人の仕事と放免  
村入用・詫状と内済  
年貢・諸役・伝馬  
検地帳・帳簿の引継ぎ・印鑑

第三章 村のなりわい

- 第一節 農業と水利
  - 第二節 広がる耕地
  - 第三節 さまざまなりわい
- 作物・耕作日誌・水利普請・治水  
新田開発・訴訟・秣場・境塚  
諸稼ぎ・職人・機織り・水車・奉公

第四章 村と領主

- 第一節 旗本の入封と系譜
  - 第二節 鷹場の村
  - 第三節 代官の支配
  - 第四節 中里村と武蔵氏
- 知行宛行・系譜  
負担・清戸御殿・鷹狩・尾張藩役人  
御用留・代官の交替  
旗本の支配・先納金・旗本財政窮乏

第五章 変わりゆく村

- 第一節 土地売買と金融
  - 第二節 交通と流通
  - 第三節 村の事件
  - 第四節 村々の連帯
  - 第五節 災害と貯穀
- 証書類・金融帳簿・出入・訴訟  
道・引又橋普請・河岸場・駄賃  
村方騒動・治安  
文政改革・所沢と田無・江戸との関係  
火災・飢饉の対応・貯穀・合力

第六章 家のくらしと人の一生

- 第一節 家と村人
  - 第二節 婚礼と出生
  - 第三節 葬祭と供養
  - 第四節 屋敷と生活
- 宗門帳・家数人数書上・小前持高帳  
出産・帯解・婚姻・孫祝・祝儀帳  
香典・見舞帳・墓石  
屋敷普請・衣食住

第七章 村の信仰・教育・文化

- 第一節 村の寺院
  - 第二節 祭礼と講
  - 第三節 代参と旅
  - 第四節 手習と学び
- 住職・什物・寺格・月牌証文・祠堂金・修繕  
神楽・稻荷講・三峰講・大日講  
旅日記・土産  
往来物・算術・漢文試筆・俳諧

第八章 村の幕末

- 第一節 黒船の情報
  - 第二節 熊本藩の支配
  - 第三節 助郷負担の増加と和宮下向
  - 第四節 江川農兵と兵賦金
  - 第五節 武州世直し一揆
  - 第六節 戊辰戦争と市域
- 周辺聞書類  
永青文庫史料  
蕨宿史料・和宮・家茂進発  
江川文庫史料・武蔵氏関係

## 資料編 近代 目次案

### 一 近代国家の形成と清瀬

#### 行財政

一 維新の変革と北多摩の村々

二 自由民権運動と北多摩郡

三 清瀬村の誕生

#### 農村・農業

一 近代多摩の農村

二 大日本農会北多摩支会の誕生

#### 商工業

一 清瀬村の商工業

#### 教育

一 近代教育の始まり

二 清瀬の私立学校

#### 軍事

一 近代軍隊と村

二 日清戦争

#### 医療・福祉

一 地域医療の始まり

二 伝染病とその時代

#### 村の生活

一 文化と風俗

### 二 大正デモクラシーと清瀬の発展

#### 行財政（明治後半～大正後半）

一 日露戦争とその時代

二 大正デモクラシーと清瀬村

三 関東大震災と清瀬村

#### 農業

一 近代農村への渴望―中里出荷組合

二 米騒動と清瀬村

#### 商工業

一 武蔵野鉄道の開通

二 商工業の発展

三 清瀬村の商店

#### 教育

一 小学校

二 高等小学校

#### 社会福祉・医療

一 疫病と対策

二 清潔法とその実践

三 関東大震災と清瀬村

#### 兵事

一 日露戦争と清瀬村

二 在郷軍人会と銃後

三 戦死者慰霊と戦傷病者

四 第一次世界大戦とその時代

#### 村の生活

一 文化と風俗

### 三 清瀬村の昭和戦前期

#### 行財政

一 東京市と清瀬村

二 準戦時・戦時下の村議会と村財政

三 終戦末期の清瀬村

#### 農業

一 清瀬農業と東京の青果市場

二 「普通畑」への転換

三 糞尿処理追大溜設置

#### 商工業（インフラ含む）

一 小金井街道の完成

二 清瀬村産業組合

#### 教育

一 学童人口の急増と尋常小学校

二 清瀬青年学校

三 清瀬国民学校

四 疎開地としての清瀬

#### 社会衛生

一 戦時と村の衛生

二 「病院街」と地域医療

#### 病院

一 府立清瀬病院の設置

二 「病院街」の形成―

#### 兵事・軍事

一 満州事変の衝撃

二 日米開戦

三 清瀬村の戦争―戦没者の慰霊

四 敗戦

#### 村の生活

日記（抄）

一 占領政策と戦後改革（昭和20～30）

1 戦後改革期の村政

民主化の動き

新しい教育と大泉高校清瀬分校

清瀬町の誕生（昭和29）

町営・都営住宅の建設

2 戦後復興期の経済・社会

農地改革

二つの農協

戦後の農業（柳瀬川と稲作・台地上の麦・

野菜・茶の栽培）

戦後の商工業（戦後復興期の商業・醤油

の生産・「市」について）

交通の発達（西武線の複線化）

戦後復興期の病院

戦後の社会（引揚者寮・諸事件・戦後文

化）

農村諸団体の活動

社会運動の高揚

二 高度経済成長（昭和30～50）

1 都市化の中での村政

村政の動向

大型団地の建設・ベッドタウン化

地番整理と町名変更

清瀬市の誕生（昭和45）

小中学校の増設

清瀬高校・清瀬東高校の開校

気象衛星センター開設（昭和52）  
文化財行政（日枝神社獅子舞・下宿囃子・  
中里万作の文化財指定）

2 都市化の中での経済と社会

農業 農地の減少

商工業 商店街の繁栄

交通の発達 清瀬駅と周辺の整備 けや

き通り工事開始

国鉄武蔵野線・新座貨物ターミナルの設

置

関越道の開通

公害問題（河川の水質汚濁・光化学スモ

ッグ）

防災無線の運用開始

大林組技術研究所開設（昭和40）

高度成長期の病院

社会の変化（清瀬音頭・移動交番・火葬

の普及）

三 安定成長期からバブル経済へ（昭和50～平成3）

1 安定成長期からバブル経済期の市政

市政の動向

居住環境の整備（公園ほか）

二つの大学の移転（日本社会事業大・明

治薬科大）

国立看護大学校

清瀬水再生センターと周辺の体育施設

2 安定成長期からバブル経済期の経済と社会

農業（地価高騰の中での農業）

商工業（郊外型店舗や大型店の進出）

交通の発達（けやき通り完成）

社会の変化

バブル経済下の病院

四 平成から未来へ（平成3～30）

1 バブル崩壊後の清瀬

複合不況下の市政

少子化と学校教育

地価下落と街づくり

農協の合併

2 東日本大震災と清瀬

3 平成の終りとこれからの清瀬

市政の動向

少子高齢社会の課題

男女共同参画社会にむけて

生涯学習（コミュニティプラザひまわり）

ケヤキロードギャラリー

きよバスの運行

市民まつり・ひまわりフェスティバルほ

かいイベント

農業の課題（にんじんなど野菜の生産

酪農 ぶどう）

活躍する文化人・芸能人

映画・ドラマと清瀬

## 清瀬市制施行 50 周年記念誌（啓発版）について

## 1 レイアウトについて

## (1) 紙面構成

巻頭パノラマ写真		
巻頭挨拶		
目次		
凡例		
市制 50 年を振り返る（50 年の概説と清瀬の年表）		
清瀬の歴史 を図版で振 り返る(☆)	遺跡・東山道（市内の遺跡や悲田処等について）	図版中心
	北条氏と清戸番所	
	鷹場	
	村絵図	
清瀬の歴史 を写真で振 り返る	清瀬を写真で振り返るテーマ 1 つのテーマで基本的に見開き 1 頁 1 頁に 2~3 枚の写真を想定 予定テーマ	写真中心
	農業	
	暮らし 1	
	暮らし 2	
	結核療養	
	商店街	
	道	
	鉄道	
	祭	
	子ども	
	自然	
	役所	
	行事	
	空中写真	
団地		
予備テーマ		
書誌等		

## (2) 仕様について

- ①判型：A 4 判
- ②頁数：64 P（4 色）
- ③材料：（表紙）光沢紙コート（110 kg）PP 加工（本文）光沢紙コート（90kg）
- ④価格：
- ⑤発行部数：3000 部
- ⑥頒布方法：市制施行 50 周年記念式典にて配布・市史編さん室にて販売

## 2 製作基本方針

写真や図等を多く取り入れるとともに、平易な文章で記載するなど、広く市民に親しまれる内容にする。

## 3 刊行スケジュール

年度	作業	
	委員会の担当	事務局の担当
平成 30 (2018) 年度	構成確認	テーマ写真選定 原稿作成
平成 31 (2019) 年度	最終写真選定 ☆図版中心部分原稿作成 (部会長) 確認 監修	原稿作成 編集・校正 (事業者委託)
平成 32 (2020) 年度	印刷契約⇒納品 (9月中旬) 10月1日刊行	

### (1) 平成 31 年度

- ①編さん委員による写真選定会を実施
- ②市史編さん室にて下原稿を製作
- ③監修
- ④編集 (デザイン) 業務委託

### (2) 平成 32 年度

- ①印刷業務委託 3000 部

## 4 タイトル

未定 (今後の編さん委員会にて決定)